

ちいさな証

在日韓国人三世として

呉允栄

おうゆんによん

在日大韓国基督教会会員

私はクリスチヤンの家庭に生まれ、幼い頃から両親と共に在日大韓基督教会へ通っていました。この教会は、教会員のほとんどが私と同じ在日韓国人もしくは韓国からの移住者で、礼拝は日本語と韓国語の両方で行われます。韓国にある教会との交流も盛んで、学生同士の交わり等を通して韓国の文化に触れる機会もあります。教会に通う学生

の集まりも多く、同じ文化的・民族的背景を持つ同世代の友人と交流を持つ事が出来ました。教会での様々な集まりや交流を通して、幼い頃から自然と自分が在日韓国人であるという事を認識していたように思います。

在日韓国人二世として日本に生まれ育った両親は、本名と日本名の両方を持ち、時に差別を受ける中「どうして自分は韓国人に生まれたのだろうか」と恨めしく思う事も多々あったそうです。しかし、そのような状況の中でも在日として強く誇りを持って生きていって欲しいという願いのもと、私達兄弟三人は本名だけを与えられました。私は小学校からずっと日本の学校で学び、小学生の頃はごく稀に「変な名前」「韓国人」とからかわれましたが、それほど苦痛に思いませんでした。当時は幼すぎて分かりませんでしたが、今振り返ると、教会生活や他の在日韓国人との交流の中で、自分が在日である事を自然と受け入れ、「クラスメイトとは違って当然」と感じていたのだと思います。

自分が在日である事、そして自分のアイデンティティについて、子供の頃は深く考える機会はありませんでした。もちろんこれは、両親の世代とは違って、これまで日本で在日として不自由なく生きてこられたおかげでもあります。しかし高校生の頃、アメリカに留学していた姉の話を聞き、少し考えさせられる事がありました。姉は高校からアメリカに留学し、現地の学校で勉強していました。アメリカでは自分の出自を説明する時は、Korean Japaneseと説明します。日本で生まれ育った韓国人で、名前は韓国の名前だと伝えると、それを聞いたアメリカ人

は特に大きな反応も無く受け入れます。日本であれば、「国籍は?」「日本語上手だね。いつから日本にいるの?」等、様々な質問をされます。「じゃあ、結局日本人って事だね。私達と同じだね。」と言われた経験も非常に多いです。ところがアメリカでは、そういった質問は全く無いそうです。アメリカは多民族国家で、ありとあらゆる国からの移民が生活しています。その為、それぞれが違った人種的、文化的背景を持っている事が当たり前で、それらを全てひっくるめて「アメリカ人」と呼ぶからです。この話を聞いて私は、「私は日本人でも韓国人でもなく、在日韓国人。そのままが良いんだ。こういう他と違ったアイデンティティがあっても良いんだ。」と、目の前が急に明るくなったように感じました。

一つ、高校生の時に体験した印象深いエピソードをご紹介します。高校の研修旅行でウィーンに行った時、学校がパスポートを一時的に管理していた為、事前にパスポートを提出していました。そして空港でパスポートを返してもらった時、担任の先生が私を含めた韓国籍の生徒三人にのみ、他の生徒から隠れるようにこっそりと返却してきたのです。恐らく、クラスメイトの中に自分が在日韓国人である事を隠していた生徒がいたのでしょう。先生なりの気遣いだったのでありますが、「私の国籍は、隠さなければいけないようなものなのか…」と、自分の存在を否定されたようでショックを受けました。日本社会の中で、自分だけが「異質な」存在であるという事で、自身の拠り所が無いような、不安な気持ちになる時もありました。しかし、教会で同じ境遇の友人と過ごす機会を持つ事で、同じ思いを持つ仲間がいると心強く思い、不安を解消する事が出来ました。

日本では当たり前のように通っていた教会でしたが、私はスイスに留学して初めて本当に主と向き合い、全てを委ねる事が出来たと思っています。外国で一人で生活をする中、日々の暮らしの中にいつも主がいて下さる事を実感し、再認識しました。ウスターでの礼拝と賛美、お聞きしたすばらしいメッセージ、温かい皆様に支えられて恵まれた教会生活を送れた事を心から感謝致します。本当にありがとうございました。

呉 允栄姉はピアニストとしてスイスに留学され、3年半スイス教会でお交わりを頂きました。同じ音楽家の澤田恵さんを昨年9月の洗礼まで親友として導かれました。